

志功展と音声ガイド

内藤 真理子

棟方志功展を観に行った。

以前の志功展で、迫力のある油絵を見た記憶があり、期待して行ったのだが、最初に展示されていたのは、小さな油絵の模写だった。

これは、志功が画家になる前に、ゴッホや、誰もが知っているような西洋の画家の作品を見て魅了され創作意欲を掻き立てられ描いたそう。まだまだどこにも志功らしさがなく、写実的で美しい作品だった。

音声ガイドを聞きながら、棟方志功生誕百二十年の展覧会を催した主宰者の「これが偉大な版画家の原点だ！」という声が聞こえそうだった。

音声ガイドは、棟方志功の作品を鑑賞するのに最適だった。

縦長の大きな連作が多く、壁一面に、ズラリと作品がシリーズごとに並んでいる。

特に『大和し美し』や、『基督の柵』『飛神の柵』等、柵になって並べられている細長く巨大な版画の前では、圧倒的な迫力に感動しながら、プースの中に置かれた椅子に座り、音声ガイド様々で、聞き入った。

そして、見れば見るほど力の入った躍動的な版画だと思った。

我が家でも、棟方志功の版画を居間に飾っている。丸い縁どりの中に、ふくよかな女性が胸のあたりまで描かれていて、その四隅に「花、開、亦、韻」という文字が描かれ、その下に、題、亦、志功と書かれて、朱印が押してある。

実家から持って来たもので、もう何十年も眺めては、癒されている。

だが、展覧会で見ているものは、比較にならないほどの躍動感、存在感がある。海外の作品賞も総なめに行っているとあった。

改めて、凄い人、凄い作品と、心底思った。

ちなみに我が家に飾ってある版画は、ある時、本物かどうかと詮索して虫眼鏡で点検したら、印鑑以外は印刷だった。それでも外したくないほど、素晴らしい作品だと思う。

本物がもっと心を打つのは音声ガイドのせいばかりではなかった！